谷川健一

鍛冶屋の母

思索社

谷川健一

鍛冶屋の母

著者略歴

谷川健一（たにがわ・けんいち）

1921年熊本県に生れる。

東京大学文学部卒業。

主著「沖縄・辺境の時間と空間」三一書房

「魔の系譜」紀伊国屋書店

「古代史ノオト」大和書房

「青銅の神の足跡」集英社ほか。

鍛冶屋の母

昭和54年11月10日　印刷
昭和54年11月30日　発行
©1979
著　者　谷　川　健　一

発行者　片　山　修　三

印刷所　奥　村　印　刷　㈱

製本所　小　高　製　本　㈱

思　索　社

東京都港区南青山 3—8—36（〒107）
電話　東京（03）404—2481
振替　東京 7—112780

0039-1048-3326

鍛冶屋の母

中世説話における鉄人伝説

目次

第一部　鍛冶屋の母　5
弥三郎婆　7
伊吹の弥三郎　47
酒呑童子　65
平将門　83
弁慶　103
戸隠の鬼女　119
終章　127
註　142

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第二部　銅と鉄の旅　151
風を待つ人びと　153
千種の谷で　158
壬申の乱の一考察　167
鍛冶神の南下　191
あとがき　207

第一部　鍛冶屋の母

弥三郎婆

一

数年前、佐渡からの帰途、海上から望見した越後の海岸線に一箇所、大地の塊が海ぎわまでせり出しているのが注意を引いた。それは原始の雰囲気をまだ引きずっているように荒々しく、何か異様な印象を与えていた。人に聞くと弥彦だという。弥彦山塊のつらなりに国上山がある。良寛の五合庵のあるところとして知られている。国上という名の由来はおそらく海を航行する者が、海上から眺めて命名したものにちがいない。つまり、突出した陸のことだったのが、のちに国上と変化したと、私は考える。柳田国男は「雪国の春」の中で秋田県の男鹿半島もまた宮城県の牡鹿半島も、さては福岡県の岡の湊も、すべて海から移住した人たちの名付けた地名と言っている。因幡の岩美郡にも陸上という地名がある。「古事記」によると、崇神天皇の時、日子坐王を丹波国につかわして、玖賀耳の御笠を殺したとある。吉田東伍は、「越後の国土と弥彦神社」の中で玖賀耳という地名がないところから、玖賀耳は国神の意味であるとして、国神の御笠がいたので、後世までクガミの名をのこしたのだろうと言っているが、むしろ、丹波の陸（国）にいた耳という酋長と解すべきであろう。これは越後の国上と命名の動機を同じくするものである。〔註1〕

ところで越後の国上を海から遠望したときの名であるとするもう一つの理由がある。新潟

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

県の地図を展くと、弥彦山塊と海にはさまれたせまく細長い海沿いの道に、間瀬、野積、寺泊などの集落が北から南に並んでいる。林羅山の「伊夜比古神廟記」によると、元明帝の和銅二年、越後国の米水浦というところに光が見えて七日七夜やまなかった。海人はこれをあやしんでいた。そこで坂上河内の遠祖が見に行くと、神船が海に浮んでいたので、この光の飛んできたところに祠を建ててまつった。米水浦ははじめは逃浜と名付けた。ところが神がやってくると白いシトギや白い水がそこから流出したので米水浦と呼ぶようになった。その神のたずさえてきた宝物はみな石と化した。しかし形は宝器のままであったという。米水浦というのは野積（現在、寺泊町野積）にある。ということから現在の社地に鎮座する以前、弥彦神は野積にまず上陸したという伝承のあったことを知る。終戦後、宮栄二氏によって発見された弥彦神社のもっとも古い縁起書には、「大国」からの神のもってきた宝物、すなわち鑊子釜、カワコ石、鍔石、御器、御手箱、家具などことごとく石となったとある。藤田治雄氏はこの宝物の中の鑊子釜に注目する。それは鉄山の守護神である金屋護神または金鋳護宮と関連があるというのである。また「大国」は中国大陸のこととする。すなわち中国大陸や南朝鮮あるいはそれらを背景にした北九州から、鍛冶職の一団が、弥彦山塊の日本海に落ちこむあたりの、野積、間瀬に上陸したことを意味すると藤田氏は推測する。

神は米水浦（野積浜）から猿ヶ馬場峠を越え、桜井の里にしばらく休息したあと弥彦の里

に入って宮居を定めたとされている。野積の伝説によると、神がそこを立ち去ったのは野積浜のおヨネという女と結婚し、十二人もの子どもを生んだのが嫌になったからという。そこで、身を隠そうと弥彦山へ登ろうとしたら、木を切っているじいさんに会い「私の後よりこうこうしかじかの者がくるから、けっして私が弥彦山へ登ったと話してはならないぞ」と固く口どめして登った。そのじいさんは後より迫って来たおヨネに問いつめられ、話をしようとしたが、口を開けたまま閉じられず、とうとうしゃべることができずそのまま死んでしまった。それで妻戸神社の石を口開け石という。おヨネも死んで、その怨念が蛇になって、部落の人に姿をみせる（「高志路」二〇四号）。

つまりこのおヨネは米水浦の人格化したものにほかならない。おヨネは、慶応四年に書かれた「妻戸記」によると、熟穂屋姫命となっている。弥彦神夫妻は、米水浦に塩たきや手繰網法を教えたという。弥彦神の妃神の熟穂屋姫命をまつる神社を妻戸神社といい、その神社の祭日は妃神の命日の三月十八日である。現在はひと月おくれの四月十八日が祭日である。

藤田治雄氏によると、妻戸神社の名称が弥彦神社の文書に初見されるのは「伊夜比古神社記」からである。この「伊夜比古神社記」は元禄元年に神祇宗の橋三喜が、神主高橋左近光頼の依頼によって古い縁起書を書写したものとされているが、じつは橋三喜の自筆と考えられる。この中で妃神の熟穂屋姫命とそれを奉斎する妻戸神社がはじめて出てくる。というこ

とから元禄以前には妃神信仰はなかったと藤田氏は述べている。妻戸神社が創建されたのも古くからではなかったと推定される。しかし、さきに述べた「野積の口あけ石」の伝説はそのまえからあったと考えることは一向に差支えない。そして、のちになって妻戸神社の妃神の命日を三月十八日にきめたのは、三月十八日はもともと国上寺の稚児が弥彦神社に参列し舞を奉納する日であったということに由来するものであろう。

さて、野積には弥彦の神は片目であるという伝説が残っている。それは神が弥彦に移るとき足をすべらしてウドで目をついたからだという。それで弥彦山にウドが生えないともいわれている。同様な話は岩室村間瀬にもあり、弥彦神は兎の道案内で山を登ったが、山中でウドで目をついたとされている。このほか弥彦山の周辺には弥彦神がウドで目をついて片目となったという話が点々と分布していることを藤田治雄氏は指摘している。ウドがタラの芽となっている場合も少なくない。

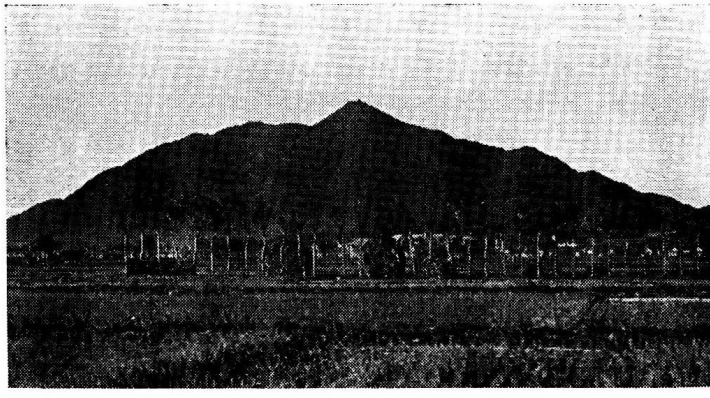
では、弥彦神が片目であるという伝承と、弥彦神社及び野積の妻戸神社の祭日が三月十八日であったということをむすびつけるとどうなるか。〔註2〕

まず結論から先に言うと、片目の神は、銅や鉄を精錬する古代の技術労働者が、炉の炎で眼を傷つけ、一眼を失したことに由来すると私は考えている。弥生時代に始まった金属精錬の技術は、中国大陸あるいは朝鮮半島から招来されたものであるが、当時は、そうした技術

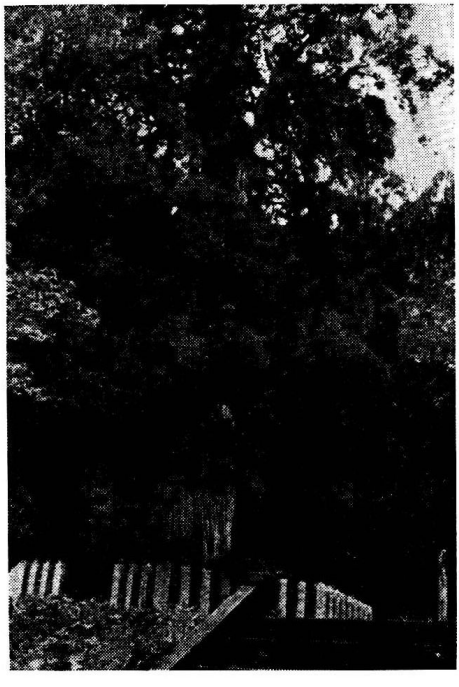
をもって石よりも硬く鋭い製品を作り出すことは、神にもひとしい仕業として驚歎の的となったことは想像するにむずかしくない。したがって眼をやられた労働者は神としてあがめられた。それが目一つの神の起源にほかならなかったと私は思う。

三月十八日については、藤田治雄氏も注目していることであるが、柳田国男の「一目小僧その他」がその日の重要性に気付いて言及している。柳田によると、三月十八日は、小野小町や和泉式部など漂泊流離の美女の忌日であるだけでなく、盲目の平景清、一眼を失した鎌倉権五郎景政、あるいは黍畑で目をついたという伝承をもつ柿本人丸に縁由ある日であった。すなわち人丸と景政の忌日は三月十八日とされ、日向の生目八幡社にまつる景清の祭日は三月と九月の十七日であったとして、柳田は次のように述べている。「もし景政景清以外の諸国の眼を傷つけた神々に、春と秋との終の月の欠け始めを、祭の日とする例がなほ幾つかあつたならば、歌聖忌日の三月十八日も、やはり眼の怪我といふ怪しい口碑に、胚胎してゐたことを推測してよからうと思ふ。丹後中郡五箇村大字鱒留に藤社(ふじこそ)神社がある。境内四社の内に天目一社があり、祭神は天目一箇命といふ。さうしてこの本社の祭日は三月十八日である」。

私もまた注意してみると、柳田のあげた例のほかに、奈良県桜井市の狭井(さい)に坐す大神(おおみわ)荒魂神社の祭日は三月十八日におこなわれることを知った。そこの祭神は大物主命、事代主命、



↑ 弥彦山をのぞむ風景。弥彦連山の西端に国上山がある。標高 313 m。



← 弥彦・宝光院の婆々杉は樹の高さ40 m。胴まわり10m余，樹齢は1千年という。

ヒメタタライスズヒメ、セヤタタラヒメで、タタラに関連した名前をもっている。九月十八日の方をしらべてみると、鏡作連の祖神の鏡作坐天照御魂神社、また阿智氏に縁由のある倭恩智神社、河内大県郡青谷にある金山毘古神社、天目一箇神をまつる近江蒲生郡桐原郷の菅田神社があげられる。これらがすべて金属に縁由のある神社であることは注目に値する。

ここにおいて、弥彦神社の祭日が旧三月十八日であったという事実が重要な意味を帯びて浮び上ってくる。つまり弥彦の神はなにがしか金属精錬に縁由のある神社ではないかという推定が可能になってくる。「妻戸記」には弥彦神社を天香語山命としている。天香語山命は「新撰姓氏録」によると、火明命の子となっている。天保五年の弥彦神社の社伝によると、天香語山命ははじめ熊野に住んでおり、名を高倉下命と申した。神武天皇の四年に越の国を高倉下命に賜わったので、命は海路をとり米水浦に着いた。そうしてそこで地元民に耕種、網漁、製塩などの業を教えた。そのときの名を手繰彦命という。そのあと弥彦に遷ったのである云々。

この話の高倉下命というのは神武東征の折に熊野で邪気払いの剣を奉った人物であり、今も新宮市のゴトビキ岩（天磐盾）に高倉神社があってそこに祀られている。戦後その巨岩の下から銅鐸が出土している。したがってこの高倉下命を銅の精錬に関わりのある物部氏系の神であるとみなすことができる。しかし吉田東伍の「地名辞書」は弥彦神を天香語山命とす

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com